

な も あ み だ ぶ つ み ょ う ご う ほ ん ぞ ん  
南無阿弥陀仏(名号本尊)  
— 如来のよび声 —

浄土真宗のみ教を伝えるためのキーワードはいくつかありますが、「難しそう」「よくわからない」という声も聞かれます。そこで私たちになじみの深い「南無阿弥陀仏(名号本尊)」「撰取不捨」「他力本願」の3つの言葉について、本願寺派総合研究所の満井秀城副所長に解説していただきます。今号は「南無阿弥陀仏(名号本尊)」です。

木像・絵像・名号  
ご本尊は3種類

浄土真宗のご本尊には、「木像」「絵像」「名号(南無阿弥陀仏)」の3種類があります。この内「木像」と「絵像」は阿弥陀さまをお姿で表したもので、「観無量寿経」というお経の中で、摩提希夫人の前に現れ出られた、お立ちのお姿を再現する形で表しています。お寺の本堂やおつとめは、ご本尊に正面から礼拝するだけでなく、内陣に出動された僧侶の方々は横から礼拝します。そのため、横からも拝めるように3次元の立体的なお姿として、「木像」をご安置するのです。これに対しご家庭のお仏壇は、正面から向かうだけですから、2次元の平面的な「絵像」で充分なわけです。

「木像」「絵像」が阿弥陀さまのおはたらきをお姿で表しているのに対し、「名号」は阿弥陀さまのおはたらきを文字で表しています。経典の根拠としては『無量寿経』の第十八願成就文に「聞其名号、信心歡喜(無量寿仏の「聞其名号、信心歡喜」)



え/ひじ みえ

## み教えの言葉を学ぶ①

筆者  
満井 秀城



本願寺派総合研究所副所長。司教。

名を聞いて信じ喜び(とあるように、私たちに託して仏となるための種(仏因)となる「信心」を成立させる「よび声」としてはたります。すなわち、私たちが直接出遇っている仏さまは、南無阿弥陀仏と「よび声」となされた「名号」で、それを本尊として

わが名を称えよ  
いつもそばにいますよ

阿弥陀さまが私たちに呼びかけてくださるのにあたって、どうして「南無阿弥陀仏」とご自身の名前で呼びかけられるのでしょうか。「○○さん」と、個別の名前で呼んでくださるはいいの

と思われませんか。島根県のあるお医者さんが、こんな話をしておられました。記憶している範囲で紹介します。

ある少年が、急な病気にかかりました。普段は元気だったのに、突然身体の不調を訴え、病院に行くと「すべ入院しなさい」と言われました。

お父さんが別室に呼ばれ、「命にかかわる難病です」と言つたのです。とにかく信じられませんが、とにかく入院させ、お父さんは会社の帰りに毎日お見舞いに寄っていました。元氣そうに見えていた頃は、「○○君、頑張れよ」「○○君、早く元氣になって帰ろうね」と呼びかけていたのですが、お医者さんの見立て通り、日に日にやつれ、衰弱していききました。

そんなわが子に対しては「○○君、頑張れよ」とは言えず、「お父さんがここにいるよ」としか言えなかったと言います。

私たちが、あらゆる仏方が「この人だけは、手の施しようがない」と懸を投げてしまわれました。そのような中であって、阿弥陀さま(ご仏さま)だけが、「わが名を称えよ。私がいつもそばにいますよ」と、ご自身の名をもち、呼びかけてくださったのです。

六字の本尊  
私の「南無」まで

ご本尊としての阿弥陀さまですから、「阿弥陀仏」だけでいいのではありませんかと思われませんか。それなのに、なぜ「南無阿弥陀仏」と六字を本尊とするのでしょうか。

それは、私たちが直接出遇わせていただいている「聞其名号」としての阿弥陀さまのよび声は、私たちの「南無」まで含めて届けられているからです。

「南無」とは、もともとインドの言葉「nāmas」が発音しやすいように変化した音便形「namo」を音写したもので、漢字自体に意味はありません。意味の上では、「帰命」と翻訳されるように、すべてをおまかせする「帰依・信順する心」のことです。それは、私たちが「阿弥陀仏」という仏さまに「南無」するのです。正信偈の冒頭も「帰命無量寿如来、南無不可思議光」とあり、光寿無量の阿弥陀仏に「帰命」「南無」するのです。

しかし、阿弥陀さまが私たちに直接届いてくださる時には、私たちの「南無」まで含めて、「南無阿弥陀仏」の六字として届いてくださっているのです。それは、私たちが阿弥陀さまにすべてをおまかせする「信心」をえもが、阿弥陀さまから届けられる「他力廻向の信心」ということだからです。迷いのもとが離れた私の心がほらいたのでは、仏因にはなりません。だからこそ「南無」まで含めて、私たちのもとへ「南無阿弥陀仏」と届いてくださっており、それを本尊としているのです。

◇  
ちなみに、蓮如上人のお示しに「他流には、名号よりは絵像、絵像よりは木像といふなり。当流には、木像よりは絵像、絵像よりは名号といふなり」(註釈版聖典1953頁)とありますが、これは他流の論理では、木像が最も詳細なお姿、絵像が名号は、それぞれさらに簡略化されているという理解であるのに対し、当流ではそのような価値観は取りませんとの説示なのです。決して「木像は低位な本尊です」と仰っているわけではありません。確かに、私たちが直接出遇わせていただいているのは「聞其名号」と言われる「名号」なのですが、「木像」や「絵像」が偽りや低級だとするのはありません。その証拠に、当の蓮如上人が建立された山科本願寺のご本尊は「木像」であったことが記録から判明しています。最初に申しましたように、「木像」には、お寺の本堂では横からも拝める利点があるからです。(8月26日号は「撰取不捨」)